

# 「評価活動」としてのCan-do statementsによる自己評価の効果

—2013年極東大学校現地日本語研修での取り組みから—

二ノ神 正路・武田 育恵

## 1. はじめに

韓国・極東大学校日本語学科の学生を文教大学文学部が研修生として受け入れる「現地日本語研修」は2013年で8回目の実施となった。

両大学では、これまで本研修に対して「体験学習を中心としたプログラム作り」と「文教大生による授業及び授業運営」という2つを中心に取り組んできたが、2010年研修（第6回）において、体験学習は「体験から学ぶという意識づけをいかに強化していくべきか」が今後の課題であることを確認し、文教大生による授業及び授業運営については、極東大生（以下、K研修生）の中には自発的に文教大生（以下、B実習生）の授業のフォローをしようとしていた者がいたなど、研修授業が実習として運営されることで「学習者の授業参加における自律的行動を促している可能性がある」ことを指摘した（二ノ神2011）。

そこで、2012年研修（第7回、2011年は実施せず）では、目標を「学びの意識づけ」と「学習面での自律性の向上」<sup>1</sup>として体験学習での発話と授業態度を中心にしたCan-do statements（以下、Cds）による自己評価を行い、さらに2013年研修では、2012年研修を踏まえて、事前学習・体験・活動報告（フィードバック）というすべての授業において自己評価を「評価活動」という学習の一環として導入することにした。<sup>2</sup>

本稿では、2013年現地日本語研修で実施したCdsを用いた自己評価の取り組みを中心に報告するとともに、この実践からどのような成果が得られ、どのような課題が残ったのか考察する。<sup>3</sup>

## 2. Cdsによる自己評価

これまで、日本語教育では「できる」という形で学習目標を設定したり、評価に活用したりすることはあまり活発に行われていなかった。

どれだけ言語知識があるのか、どれだけ学習したのかという「わかる」といった観点から学習の習熟度を測る傾向が強く、その結果「試験では点数が高いのに、会話があまりできない」という学習者を生み出すことにもなっていた。現在、日本語教育に限らず、世界の外国語教育はこうした問題点から脱却するため「わかる」から「できる」への転換がなされており、Cdsは、こうした流れの中で生み出された言語能力を測るひとつの方法だということができる。

このCdsを用いた自己評価とは、簡潔に述べると「具体的なある言語行動場面を短い文章で提示し、それに対して『できる』『できない』を自分で判断する」評価の方法である。たとえば「テレビのニュースを聞いて内容が理解できる」「新聞の記事を読んで、内容が理解できる」などのような質問に対して「できる」「できない」を基準に自分で評価するわけである。

島田（2010）では、Cdsの特徴のひとつとして「Cdsの項目は実生活に現れる様々な言語行動であるため、『教授したこと』だけではなく『学習者が身につけた』言語能力を測定できる」ということを挙げているが、本研修の「体験学習を中心としたプログラム作り」における学習を測る上でも、実際に体験したことに対して「何ができたか」を確認することができ、「学びの意識づけ」を行うにも有効な方法であるといえる。

また、自己評価を行うことについて、梶田（2001）は「自己を対象化してみる機会」「これまで意識していなかった面に新たに気づき、またそこに潜む問題点があればそれをはっきりさせることができる」と述べ、トムソン木下（2008）は「自分ができること、できないことが意識化できる」「できないことの意識化から、次の目標が設定できる」「学習者自身が言語学習の方向を修正することで言語習得の効率が上がる」などの利点を挙げており、K研修生の「学習面での自律性の向上」にも効果を期待できるものと考えられる。

### 3. 2013年現地日本語研修の状況

#### 3.1 研修の概要

2013年現地日本語研修の実施期間は6月19日から7月3日までの15日間で、研修に参加したK研修生は女性13名、男性19名の32名（4年：男性2名、3年：女性4名・男性7名、2年：女性8名・男性5名、1年：女性1名、男性5名）、実習として参加したB実習生は大学院生1名（女

性)、学部生7名(4年:女性5名・男性2名)、日本語の総学習時間は全部で38コマ(1コマ45分)であった。

1日の基本的な授業時間は4コマで、午前授業(1限9:00~9:45、2限9:45~10:30、3限10:40~11:25、4限11:25~12:10)と午後授業(5限13:00~13:45、6限13:45~14:30、7限14:40~15:25、8限15:25~16:10)があり、当日の体験や行事に合わせて予定を組んだ。研修での授業は体験すること(体験学習)を中心に計画しており、2013年研修では「日本の大学生の就職や職業観を知り、自分の将来のキャリアを考える」というテーマに基づいた「文教大学キャリア支援課訪問」「日本人の働く様子を観察する」などの活動と、「日本の大学生生活を知る」というテーマに基づいた「文教大生へのインタビュー」「サークル活動体験」などの活動を行ったが、これらの授業は全て「事前学習→体験→活動報告(フィードバック)」という流れで進行した。また、授業以外の行事では、両大学のスタッフ打ち合わせ会、スタッフ反省会、K研修生による研修の中間報告会・最終報告会、文教大学主催交流会、極東大学校主催研修打ち上げ会を行った。

研修でのクラスは、日本語能力試験のレベルを目安に初級クラス(以下、Aクラス)と中・上級クラス(以下、Bクラス)の2クラスに分かれており、極東大の担当教員が研修開始前にインタビューや面接を通じてクラスを決定した。2013年研修に参加したK研修生32名中、Aクラスが17名(1年女性1名・男性5名・2年:女性5名・男性3名・3年:女性2名・男性1名)、Bクラスが15名(2年:女性3名・男性2名、3年女性2名・男性6名、4年男性2名)で、それぞれクラスの全体的な日本語のレベルは、Aクラスが日本語能力試験N3~N4レベル、Bクラスが日本語能力試験N1~N2レベルであった。

### 3.2 プログラム日程

2013年研修では「日本の大学生の就職や職業観を知り、自分の将来のキャリアを考える」「日本の大学生生活を知る」という大学生にとって身近な話題を研修全体のテーマとしており、プログラムはそれをもとに計画した。AクラスとBクラスにおける各授業の主な活動テーマと学習活動の内容は、以下のとおりである(表1)。なお、授業以外は基本的に自由時間となっており、K研修生は授業準備や課題がない場合、東京各所を巡ったり、文教大生と交流したりするなどの活動を行っていた。

表1 2013年現地日本語研修プログラム日程

	1限 9:00~9:45	2限 9:45~10:30	3限 10:40~11:25	4限 11:25~12:10	5限 13:00~13:45	6限 13:45~14:30	7限 14:40~15:25	8限 15:25~16:10
6/21 (金)	オリエンテーション A 研修目標と自己紹介 B 研修目標と自己紹介		事前学習① "東京の観光地" A 東京の観光地で使う会話表現 B 観光地の特徴を知る		体験① "東京フィールドトリップ" A 買い物と注文 B 日本人の働く様子を観察			
6/24 (月)	活動報告① A/B 感想と評価活動		事前学習① "キャリアを考える" A 将来の職業を考える B 日韓の就職観を比較する		体験② "文教大学キャリア支援課訪問" (A・B交代で訪問し、待っているクラスはフリートーク時間) A 日本の学生の就職活動や人気職種についてインタビューする B 自分のやりたい仕事について相談する			
6/25 (火)					活動報告② A キャリア支援課で得たこと、評価活動 B キャリア支援課で相談して得たこと、評価活動		事前学習② / 体験③ A/B B 文教大生と極東生による合同レクリエーション実施	
6/26 (水)					活動報告③ A/B 評価活動		事前学習④ / 体験④ (交流会) A/B 交流会でのインタビュー C 極東生にインタビューを実施	
6/27 (木)			極東大中間報告会		活動報告④ A インタビューした相手についてペアでまとめ、紹介する B インタビューした相手について紹介し、自分の意見を述べる		事前学習⑤ A/B 日本の大学生活について比較し、共通点や相違点を考える C 終了後、体験⑤ 文教大のサークル活動参加	
6/28 (金)	活動報告⑤ A/B 日韓の大学生活について感じたことをまとめる 評価活動		事前学習⑤ (最終試験に向けた準備) A 本研修で得たこと、感じたことをまとめ、原稿を作る B 自分の将来についてシナリオを考える					
7/1 (月)	体験⑤ (最終試験) A スピーチ B Aの発表にコメントを書く		活動報告⑥					
7/2 (火)	体験⑥ (最終試験) A Bの発表にコメントを書く B 自分の将来シナリオについてプレゼンテーションをする		活動報告⑦		極東大最終報告会		両校スタッフ反省会 最終成績発表会	

※ 日程表は授業実施日のみを記載 (K 研修生は 6 月 19 日に来日し、20 日は極東大だけでオリエンテーションを実施している)

### 3.3 授業紹介

ここでは「事前学習→体験→活動報告」という流れに沿って、Bクラスの事前学習②「日韓の就職観を比較する」(6月24日3,4限)、体験②"文教大学キャリア支援課訪問"「自分のやりたい仕事について相談する」(6月24日5,6,7,8限)、活動報告②「キャリア支援課で相談して気がついたこと、評価活動」(6月25日5,6限)を2013年研修で実施した授業の一例として紹介する。

#### Bクラス テーマ：キャリアを考える

事前学習② 「日韓の就職観を比較する」(6月24日 月3,4限)

学習目標：日本の就職活動事情を知り、韓国の就職事情と比較し違いを見つけられる。

最初にB実習生の数名に就職活動の実体験を語ってもらい、K研修生は日本の学生の就職活動の実態を学習した。それからワークシート①で自己分析を行い、自分が将来希望する職業には自分のどのような

ところを生かすことができるか分析を行った。次にキャリア支援課で相談するためのグループに分かれてどのような質問をするのかワークシート②のQ&Aシートを作成し、相談の会話練習を行った。最後に授業の振り返りシートを記入して、事前学習での学習事項を確認して授業を終了した。

## 体験②キャリア支援課訪問「自分のやりたい仕事について質問する」 (6月24日 月5,6,7,8限)

学習目標：支援課のスタッフに実際に質問・相談ができる。

日韓の就職事情の違いやグループに分かれて準備した相談内容など事前学習②で学んだことを生かして、文教大学キャリア支援課スタッフからキャリア支援課の活用方法を聞き、文教大学に在籍する留学生の就職状況を尋ねたり、実際に自分が将来希望する職業について相談した。

## 活動報告②「キャリア支援課で相談して気づいたこと・評価活動」(6月25日 火5,6限)

学習目標：キャリア支援課のアドバイスから、やるべきことを見いだせる。

支援課訪問で自分が得たことについて、分かりやすく相手に伝える（発表）ことができる。

話し合いで、自分の意見を出し、仲間の意見を聞ける。

キャリア支援課で体験したことを整理するため、「①自分の将来就きたい職業」「②支援課からどんなアドバイスを受けたか」「③将来のために、自分が取り組むべきこと」という3つの内容で発表用ワークシートを作成し、各自発表を行った。その後、2つのグループに分かれたK研修生にB実習生とアシスタントの学生が加わり、就職活動についてのそれぞれの考えや意見を交換し、最後に振り返りとして評価活動を行った。

## 4. 現地日本語研修の評価の取り組み

### 4.1 現地日本語研修の評価と成績

極東大学校では本研修を単位認定（2単位）している。そのため、研修終了後には点数化された成績を提示することが必須となっており、研修の授業最終日には単位認定を行うための「最終試験」を実施して

いる。だが、この最終試験を行う目的は成績のためだけではなく、研修での成果を披露する意味もある。たとえば2013年研修において、Aクラスは「研修全体を通じて得たこと感じたこと」というテーマでスピーチをすること、Bクラスは「自分の将来シナリオ」についてプレゼンテーションすることが最終試験の課題であったが、両クラスともにB実習生や極東大、文教大の担当教員の前で課題を行った。

#### 4.2 2012年研修における自己評価の取り組みと課題

2012年研修では、体験学習における発話と授業態度に重点を置いて自己評価を実施した。A、Bクラスはすべての体験に対し、それぞれのレベルで統一された評価基準を示したルーブリック（資料1）を用い、「発話内容」「発話表現」「態度」の3分野に対し4段階のスケールで自己評価をするようになってきている（資料2）。また、評価カードには学習内容と学習目標を記入する欄と自分のコメントを記述する枠が設けてある。

資料1 2012年研修 Bクラス（中・上級）用評価基準シート

	チェック項目	4（よくできた）	3（できた）	2（もう少し）	1（がんばろう）
発話内容	話題の適切さ	その話題にふさわしい話がより詳しくできた。	その話題にふさわしい話ができた。	ときには、話題からはずれることもあるが全体的にはふさわしい話ができた。	あまりその話題にふさわしい話ができなかった。
	論理性	根拠を示し、理由を詳しく述べ、あるいは、意見を展開し、立論するなどして論理的に話すことができた。	根拠を示したり、明確に詳しく述べるなど、論理的に話すことができた。	時には不明確で、根拠のないときもあるが、全体的には論理的に話すことができた。	不明確で、話していることも一貫性がなく、あまり論理的に話せなかった。
	わかりやすさ	聞き手が詳しい部分までしっかり理解できるように話すことができた。	聞き手が理解できるように話すことができた。	時には聞き手が理解できないときもあるが全体的には理解できるように話すことができた。	聞き手が理解できないことも多く、あまりわかりやすく話すことができなかった。
発話表現	会話のストラテジー（言い換え・聞き直し等）	言い換えたり、聞き直したりして話し場面において述べたいことを表現できた。	言い換えたり、聞き直したりして柔軟に述べたいことを表現できた。	限られた範囲で言い換えたり、聞き直したりしてある程度述べたいことを表現できた。	決まった表現しか使えず、言い換えたり、聞き直したりすることがあまりできなかった。
	語彙の運用	時には間違えることはあるが、大きな語彙の誤りはなく話せた。	時には間違えたり、間違った単語を使うこともあるがコミュニケーションを邪魔しない範囲で話せた。	復讐な語などをするとき、大きな誤りをすることはあるが、多様な語彙を使いこなして話せた。	狭い範囲の決まった語彙だけを使ってしか話せなかった。
態度	積極性	とても積極的に取り組んだ。	積極的に取り組んだ。	積極的に取り組んだときもあったが、そうでないときもあった。	積極的に授業へ取り組むことがあまりできなかった。
	意欲	何事にも意欲的に取り組むことができた。	意欲的に授業へ取り組むことができた。	意欲的に授業へ取り組むときもあったが、そうでないときもあった。	意欲的に授業へ取り組むことがあまりできなかった。
	準備	かなりしっかりと授業準備を行った。	授業準備を行った。	授業準備を行っていたが、準備不足な部分もあった。	授業準備があまりできなかった。

※ 太い枠線で囲まれた部分が B クラスの日本語レベルに合わせた評価基準となる

資料 2 2012 年研修 B クラス (中・上級) 用評価カードの一例

評価カード					
2012 年 6 月 26 日 (火曜日)			B クラス 氏名		
授業のタイトル	3 限: 4 限: 第二言語習得について発表 5 限: 第二言語習得について討論 6 限:				
学習目標	・外国語学習についてわかりやすく発表し、日本の外国語学習について理解する。 ・早期外国語教育のメリット・デメリットの根拠をしっかりと示して意見交換する。				
	チェック項目	4 (よくできた)	3 (できた)	2 (もう少し)	1 (がんばろう)
学習目標					
発話内容	話題の適切さ				
	論理性				
	わかりやすさ				
発話表現	会話ストラテジーの使用 (言い換え・聞き直し等)				
	語彙の運用				
態度	積極性				
	意欲				
	準備				
コメント					

事前学習・体験を終えたK研修生は、活動報告の時間にこの評価基準シートを用いて評価カードで自己評価を行い、その体験に対する自分のコメントを記入する。B実習生はそれを確認して、さらにコメントを返すという形式をとった。

2012年研修では、先にも述べたように体験における発話と授業態度に重点を置いて自己評価を行ったが、「自分の会話力に何が足りないか知ることができた (4年女性)」「研修中、会話で使える語彙の範囲がとても狭かったので、戻ったら語彙の勉強をしたい (3年女性)」「自分の使う日本語は、インフォーマルな言葉遣いが癖になっていることに気付かされ、発表するときなどの言葉遣いをしっかり意識できるようになった (3年男性)」のように、K研修生のコメントには発話に対して学びのあったことがわかるものが見られ、自分の問題点への気づきや今後の学習への前向きな姿勢が感じられるなど、自己評価の成果を見ることができた。しかし、評価項目が発話に偏り過ぎていたためか、体験から学びを得た様子を感じ取れるコメントは全体的に少

なく、この点においては大きな課題が残る結果となった。本研修実施の本来の目的が「体験を通じてコミュニケーション能力向上へのきっかけをつかむ」ことであったことから、2012年研修では発話に重点を置いて自己評価の項目を作成したが、体験からの「学びの意識づけ」という目的とは大きくずれるものとなってしまったようである。また、「態度」の評価項目においても、自らの授業態度を自分で評価することによって、授業への参加意識や協調性がより強まるのではないかという意図から評価項目に加えたが、この評価を行ったことによる目立った効果は見られず、自分の授業態度を自分でチェックするというだけに留まるものとなってしまっていた。

それから、自己評価を活動報告の時間でのみ行ったことも改善点として課題が残った。研修授業は、すべてのテーマにおいて「事前学習→体験→活動報告」という流れで行っていたわけだが、活動報告の時間でのみ自己評価を行ったことで、全体の流れに対する意識が薄れてしまったのではないかという疑問点が浮かび上った。

そこで、2012年研修で実施した上記の点を踏まえ、2013年研修では、自己評価の方法を以下のとおり改善することを目標にした。

- ① K研修生が「事前学習→体験→活動報告」の過程に焦点を当て、意識的に自己内省ができる評価を試みる。
- ② 日本語会話に関する観点だけでなく、多角的な観点と方法を採用する。
- ③ 評価方法は、自己評価・ペア、グループなどさまざまな方法を採用する。

## 5. 2013年研修における自己評価の取り組み

### 5.1 評価活動とルーブリック

2012年研修で実施した自己評価を踏まえて、2013年研修では評価そのものを学習の一環として「評価活動」として位置づけた。事前学習・体験・活動報告のそれぞれの段階で評価基準をルーブリックで提示して、各段階の学習が終了した時点で評価活動を行った。つまり、毎日の授業の過程に評価活動を組み込み、K研修生が評価を活動の一部として認識できるように配慮した。授業の過程における評価活動を示すと以下のようなになる。




## 全体の学習目標の提示と理解



- ① 事前学習における評価基準の提示 → **事前学習** → 自己評価  
(又はペア、グループ)
- ② 体験学習における評価基準の提示 → **体験学習** → 自己評価  
(又はペア、グループ)
- ③ 活動報告における評価基準の提示 → **活動報告** → 自己評価  
(又はペア、グループ)

何を評価するかについて、2012年研修では発話と授業態度に観点を置いていたが、2013年研修は「会話」「態度」「文化」という3要素を全ての評価活動に取り入れた。これらの要素とルーブリックの記載内容については、国際文化フォーラム編（2012）の『外国語学習のめやす』を参考にB実習生（大学院生）が授業テーマと照らし合わせて作成し、極東大の担当教員と協議の上で最終的な項目を決定した。全体の学習目標としてCdsを提示したが、具体的にそれを達成するための要素となるCdsをルーブリックに入れた。

また、評価については自己評価を中心に行ったが、それ以外に活動の体制に合わせてグループ評価やペア評価なども随時取り入れた。ルーブリックをもとに評価を行った後、自由にコメントを記述できるようにした（資料3）。

極東研修 2013 学生評価表		2013年6月26日(水) - 27日(木)		
活動④ 交流会・インタビュー活動		Aクラス 名前( )		
 全体目標	①インタビューの流れを意識しながら、インタビューをスムーズに終わらせることができる。			
	②相手の話に、うなづいたり、あいづちをして、興味を持って相手と関わることができる。			
	③初対面の相手に、挨拶やお礼をしたり、相手のことを考えて会話ができる。			
① 事前学習 (自己評価)				
内容	4.よくできた!!	3.できた!	2.もう少し...	1.がんばろう(*_*)
1) 会話	習った単語や表現だけでなく、調べたり聞いたりしてインタビュー内容を考えることができる。	習った単語や表現を使って、インタビュー内容を考えることができる。	習った単語や表現を忘れてしまつて、うまく使えなかった。	習った単語や表現を使わなかった。
2) 態度	ペアで互いに積極的に意見を出しながら、インタビュー内容を考えることができた。	ペアで互いに積極的に意見を出しながら、インタビュー内容を考えることができた。	ペアで互いに意見を出したが、うまく進められなかった。	ペアのうち一人が考えて進めた。
3) 文化	日本の大学生について、韓国と比較しながら、質問を考えた。	日本の大学生についてさまざまなことから質問を考えた。	日本の大学生についてあまり考えずに質問を考えた。	何も考えないで質問を考えた。

※ 評価段階のスケールは4段階(「4.よくできた」「3.できた」「2.もう少し」「1.がんばろう」)

授業終了10~15分前を「評価活動」の時間として位置づけ、各自又はペア、グループで評価を実施した後、クラス全体で共有するために、何人かに感想を述べてもらったり、自分の評価結果とその理由について発表してもらったりした。また、これらの評価はK研修生だけでなく、B実習生も同じものを携帯し、授業中の様子を観察しながらコメントを添えて評価を行った。授業後にK研修生の学生評価表を回収し、B実習生の評価と比較して評価活動が妥当に行われたかを確認した。

## 5.2 評価活動の成果

### 5.2.1 学生評価表のコメント

ここでは、表1にある①~⑥の授業での評価活動において見られたK研修生のコメントの一部を紹介する。なお、K研修生たちが学生評価表に記入したコメントはすべて本人が日本語で記入したものであり、可能な限り原文のままにしてあるが、日本語として不自然なものに関しては筆者による修正を加えてある。

## 【活動②キャリア支援課へ行こう】

### 事前学習

- ・グループで協力して進められた。(Aクラス、1年女性)
- ・じゅんぴはよくできた。しかし、質問ができなかった。(Aクラス、1年女性)
- ・日本の仕事について興味があるので質問したい。(Bクラス、3年女性)

### 体験

- ・日本のいろいろな仕事について知ることができた。(Aクラス、1年男性)
- ・自分の将来について考えたいと思った。(Bクラス、3年女性)

## 【活動④交流会・インタビュー活動】

### 事前学習

- ・質問内容をいろいろ考えて、よかった。(Bクラス、3年男性)
- ・じゅんぴをきょうりよくした。(Aクラス、1年女性)

### 活動報告(フィードバック)

- ・緊張したが、勇気を持って話せた(Aクラス、2年女性)
- ・たくさんの人に質問したかった。でもできなかった。(Aクラス、2年男性)
- ・趣味とか得意なことについて質問できず残念だった。(Bクラス、3年男性)
- ・わからなかったことはあまりなくて、言えなかったことはラインなどでまた聞きたい。(Bクラス、3年男性)
- ・日本の大学生生活、価値観に関する質問を作らなかったのは残念だった。(Bクラス、4年男性)
- ・卒業後の質問をしたかったのにできなかった。(Bクラス、3年女性)

## 【活動⑤日韓の大学生生活】

### 体験

- ・文教生と積極的に話すことが楽しかった。(Bクラス、3年女性)
- ・日本と韓国の大学生のしゅみは同じ人もいる。サークルはない。(Bクラス、3年男性)
- ・あたらしいことばをおぼえて話せました。(Aクラス、2年男性)

それぞれコメントを見ていくと、「事前学習」においては、活動内

容に対してどのように協力したかは記述されていないものの活動②「グループで協力して進められた。(Aクラス、1年女性)」、活動④「じゅんぴをきょうりょくした。(Aクラス、1年女性)」のように、個人の活動ではなく、グループとしての活動に意識を向けているコメントがあり、協力して準備が進められた自身の学習活動に対する評価が行われていた。

「体験」では、活動②「日本のいろいろな仕事について知ることができた。(Aクラス、1年男性)」「自分の将来について考えたいと思った。(Bクラス、3年女性)」などのように学習内容についてのコメントが多かったが、中には活動⑤「あたらしいことばをおぼえて話せました。(Aクラス、2年男性)」のように学習内容以外からも学びがあったことを記述しているものがあり、少数ではあるものの、体験での学習を客観的に捉えている様子を窺うことができた。

「活動報告(フィードバック)」では、活動④「緊張したが、勇気を持って話せた(Aクラス、2年女性)」のように自分ができたこと、そして活動④「たくさんの人に質問したかった。でもできなかった。(Aクラス、2年男性)」「日本の大学生生活、価値観に関する質問を作らなかったのは残念だった。(Bクラス、4年男性)」「卒業後の質問をしたかったのにできなかった。(Bクラス、3年女性)」のように自分ができなかったことがはっきりと意識できている様子が窺え、評価活動の成果が最も現われていたといえる。

### 5.2.2 最終報告会でのコメント

本研修では、日程の中間日に「中間報告会」、最終日に「最終報告会」を行っており、今回の研修では最終報告会において「評価活動を通じて自分の日本語能力について気づいたこと、感じたこと」をK研修生に尋ねた。以下、ここでは上記の質問に対するK研修生のコメントを紹介する。なお、コメントの記述を日本語にするか韓国語にするかはK研修生自身の選択に任せており、韓国語の記述については筆者が日本語に訳した。日本語の表現として不自然なものもあるが、原文の表現を尊重し、直訳に近い形にしてある。

最終報告会(実施日:7月2日)

【Aクラス】

- ・思っていたより「話す」ことはできなかったが、以前よりは確実

に会話能力が伸びたようだ。「聞きとり」はよくできたが、「話す」方はかなり実力が足りない。(2年男性)

- ・最初の頃ほとんど会話はだめだったが、時間が経つにつれて少しずつ会話もできるようになって、もっと一生懸命やらなければと感じた。(1年女性)
- ・自分には語彙力が足りないことがわかって、もっと勉強しなければと思った。(1年男性)
- ・3年生でありながらも、自分にまだまだ実力が足りないことを感じた。(3年男性)
- ・かなり実力不足であることを感じて、もっと勉強しなければということを強く感じた。(2年男性)
- ・自分では会話の実力が高いと思っていたがそうでもなく、低い方だったようだ。(2年男性)
- ・日本語の実力もかなり不足しているし、自信もなく声も小さいことは知っていたが、今回の自己評価を通じてそれらを痛切に感じた。これからはもっと一生懸命勉強して自信を持って話さなければと感じた。(1年男性)
- ・これまでは自分に何が足りなくて、何を望んでいるのか自分自身よくわからなかった。しかし、今回の研修を通じてこの問題点を発見することができ、自分自身を変えることができるいい機会になったように思う。(1年男性)
- ・間違えたらどうしようという気持ちが強く、積極的にしゃべらなかつたように思う。この点を直さなければと感じるようになった。(2年女性)

### 【Bクラス】

- ・発音や読む練習をしようと思いました。話（日本語会話）はできていると思います。(3年女性)
- ・文法や表現、イントネーション、それと緊張しすぎるのが問題のようだ。(3年男性)
- ・自分のできないことがすぐ分かることができたと思います。話せなかつたこと、できなかつたことについて考えさせられました。(4年男性)
- ・発音が日本人と異なるということを実感した。今後はもっと発音に注意しなければと思った。(3年男性)

- ・一生懸命やろうと思いましたが、わからないことも多くてもう少し努力しなければいけないと思いました。最後の発表はまったくだめでした。(3年男性)
- ・韓国にいる時は発音がいいということをおまひり聞いたことがなかったが、ここでは発音がいいと言われたので満足している。(2年女性)

2013年研修最終報告会のコメントには、2012年研修の評価カードのコメントでも見られた「自分の問題点」についての記述が全体的な傾向として多かった。「語彙力が足りない(1年男性)」「間違えたらどうしようという気持ちが強く、積極的にしゃべらなかつた(2年女性)」「緊張しすぎるのが問題のようだ。(3年男性)」「発音が日本人と異なるということをお実感した(3年男性)」など、韓国語での記述が可能であったためか、学生評価表で見られたコメントよりも、問題点に対するポイントがより絞られたコメントとなっている。さらにそれらのコメントの中には、「もっと勉強しなければ(1年男性)」「これからはもっと一生懸命勉強して自信を持って話さなければ(1年男性)」「発音や読む練習をしようと思いました(3年女性)」「今後はもっと発音に注意しなければ(3年男性)」とあり、トムソン木下(2008)が自己評価の利点として挙げていたように、できないことが意識できたからこそ、次の目標を設定できるようになったと捉えることができる。

また、問題点だけではなく、「韓国にいる時は発音がいいということをおまひり聞いたことがなかったが、ここでは発音がいいと言われたので満足している。(2年女性)」のように、これまで自分が気づいていなかった良い面を知ることができたというコメントもあつた。評価活動を行ったことで、新たな自分の一面を知ることとなり、それが自信へとつながつたわけである。プラス評価の新たな気づきが起つたという点も、今回の評価活動におけるひとつの成果としてみることができる。

### 5.3 2013年研修における評価活動の課題

2013年研修では「学びの意識づけ」と「学習面での自律性の向上」を目標に評価方法の改善に取り組んだ。一連の活動過程の中で、各活動の学習目標を意識しながら取り組むことは、ひとつの良法として提案できると考え、また実際に「できること、できないことの意識化」

「できないことの意識化による次の目標の設定」「肯定的な新たな気づき」など、一定の成果を得られるものであったといえる。しかし、多くの課題も残った。

まず、評価活動による「学習面での自律性の向上」である。「2. Cdsによる自己評価」でも触れたようにトムソン木下(2008)は、学習者の動機付けと自律的学習育成の観点から、自己評価の利点を挙げている。自己評価の手順についても、活動の前に評価基準を提示し、学習者が意識的に取り組み、学習者自身が評価をするときに自律的に次の課題を見つけることの必要性を指摘している。しかし、今回、K研修生の学生評価表の中にはコメントの記述がなく、ただループリックの評価を選んで書き入れるだけのものもあり、学習者の内省が読み取れないものも少なくなかった。できなかったことを認識できても、そこからその問題に対してどのようにアプローチしていくかという部分が漠然としており、学習過程の中で学習者が自ら課題を見つけ、それに向けて目標を修正したり加筆したりするという活動が充分に行われていなかったといえる。学習目標に対して学習者がどれだけ到達でき、何が課題であったか、またそれを自ら改善する方法を考えてこそ、自律的な学習といえるのではないだろうか。

次に、「学びの意識づけ」につなげるための自己評価の方法である。研修初期の段階で「自分で自分の評価をしたことがないからどうしたらいいかわからない」などの声が多数聞かれるなど、K研修生には自己を評価することに慣れていない様子が見られ、実際、評価活動の時間にはK研修生の戸惑う姿も多く見られた。評価活動が学習の一環であること、自身を振り返る要素となることなどの認識が不足していて、日程を追うにつれて適当に済ませてしまうK研修生も見られるようになってしまっていた。自己評価を行う意義をしっかりと理解させることや妥当性のある自己評価方法の検討など、これらの課題は、来年度に向けた改善点としてここに提示し、今後、対策していく必要がある。

## 6. おわりに

本稿では、2012年研修を踏まえた2013年研修の自己評価に対する取り組みを報告するとともにその成果と課題について考察した。

2013年研修では、事前学習・体験・活動報告というすべての授業において「評価活動」として自己評価を行ったことで、それぞれの授業で自身の学習活動に対してK研修生が「できたこと、できなかったこ

と」などを客観的に内省できるようになり、最終的にはそれらの課題を達成するために「今後、必要な日本語学習」について考えられるようになったことがその成果といえる。

しかし、今回の実践は、課題も多く残るものとなった。今後、「学習面での自律性の向上」を目指す上で、K研修生自らが見つけた課題に対し、それに向けてどこまで到達でき、どのように目標を修正するかなど、自己評価の活用法をK研修生に身につけさせ、より具体的なイメージを持って課題達成への方法を考えられるようになる必要があるものと考え。自己評価についても、自己の学習を振り返るという活動そのものが学習となっていることを認識させ、自己評価を「学びの意識づけ」につなげていくことが重要であるといえる。

また、2013年研修では、評価の結果をB実習生側でも効果的に活用できなかったことが課題として残った。各授業においてB実習生側でも評価を行い、K研修生の評価と比較することで評価活動が妥当に行われたかを確認したが、その結果をコメントという形でK研修生に伝えるに止まってしまい、しっかりとその内容を確認させることが不十分であったといえる。今後は、可能な限り両者の評価結果を照らし合わせる時間を持つなどして、その活用方法を考える必要がある。

2014年研修では、これらの課題の改善に取り組み、再びその成果について分析を試みたい。

## 注

- 1 青木（1998）では、学習者の自律性を「学習者が自分のニーズや希望に役立つように、自分の学習をコントロールするための能力」としている。本稿では、学習者が自らの意志で授業での発言をコントロールしたり、意識的に授業の雰囲気をよくするために振舞うなどの行動を「自律的行動」と呼び、それと区別するために「自分の学習をコントロールするための能力」を「学習面での自律性」と表した。
- 2 2010年研修においてもCdsでの自己評価を行ったが、ここでは、自らの日本語能力に対する意識の変化を知ることが主な目的としていた。「路線図・時刻表を見て目的地に行くことができる」や「買い物のとき、値段を言われてすぐわかる」などの33項目を4段階で評価する方式で、研修全体に対する自己評価として、日程の



初日、中間日、最終日の3回にわたって実施した。

- 3 本稿の執筆に関しては、文教大学側で研修全体をコーディネートした立場から「現地日本語研修」について報告してもらうため、文教大学大学院言語文化研究科の大学院生である武田育恵さんにも執筆者として加わってもらった。

## 参考・引用文献

- 青木直子(1998)「学習者オートノミーと教師の役割」『分野別専門日本語教育研究会—自律学習をどう支援するか—報告書』国際交流基金関西国際センター
- 安場淳・池上摩希子・佐藤恵美子(1991)『異文化適応教育と日本語教育1 体験学習法の試み』凡人社
- 梶田毅一(2001)『教育評価 第2版補訂版』有斐閣双書
- 検校裕朗・二ノ神正路(2009)「体験学習を中心とした語学研修への取り組み—極東大学校日本語学科現地日本語研修の事例—」『日本語教育研究』第17輯 韓国日語教育學會
- 国際交流基金(2011)『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第12巻「学習を評価する」』ひつじ書房
- 国際文化フォーラム編(2012)『外国語学習のめやす』公益財団法人国際文化フォーラム
- 小山悟(1996)「自律学習促進の一助としての自己評価」『日本語教育』88号
- 島田めぐみ・谷部弘子・斎藤純男(2007)「日本語科目における言語行動目標の設定—Can-do-statementsを利用して—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』58
- 島田めぐみ(2010)「自己評価Can-do statementsに関する一考察：客観テストとの比較を通して」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』61(2)
- 鈴木敏恵(2012)『プロジェクト学習の基本と手法』教育出版
- 武一美・市嶋典子・キム ヨンナム・中山由佳・古屋憲章(早稲田日本語教育研究センター)(2007)「活動型日本語教育における評価のあり方について考える」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』日本語教育実践研究フォーラム
- トムソン木下千尋(2008)「海外の日本語教育の現場における評価：自

- 己評価の活用と学習者主導型評価の提案」『日本語教育』136号  
二ノ神正路(2011)「2010年極東大学校日本語学科現地日本語研修一研  
修における文教大（日本）・極東大（韓国）の取り組みー」  
『文教大学国文』第40号
- 白頭宏美・久保田美映（桜美林大学）(2009)「『自己分析シート』を  
用いた自己評価活動」WEB版『日本語教育実践研究フォー  
ラム報告』日本語教育実践研究フォーラム
- 札幌寛子(2011)『日本語教育のためのプログラム評価』ひつじ書房

二ノ神正路（韓国・極東大学校日本語学科 教員）  
武田 育恵（文教大学大学院言語文化研究科 大学院生）